和田垣謙三と明治・大正期の経済学界
（１）

三島 憲之

１、はじめに—意図と課題—

本稿でとりあげようとする和田垣謙三とは、明治中期から大正期にかけて活躍した経済学者であり、また英語・英文学者であり、さらには「鬼畜録」、「吐雲録」などの笑話を中心とする数多くの随筆集を出版したエッセイストである。現
在、その著書が一般に読まれることはほとんどないが、当時においては著名な知識人・文化人の一人であったことは間
違いない。また、鈴木の名に、大酒飲み、脱線講義、借金で有名といった、大学教授らしからぬエピソードの多い人
物としても知られている。このうち以下で対象とするのは専ら経済学者としての和田垣の側面であるが、日本の、いわ
ゆる「官学」における制度化された経済学の教育は、明治11（1878）年、旧東京大学文学部における「お雇い外国
人」教師フェロサ（Ernest Francis Fenollosa）が、大学教授として採用されたのは、明治17（1884）年、和田垣が最初である。しかし、同校で経済学
を担当する専任の日本人教官として採用されたのは、明治17（1884）年、和田垣が最初であった。日本の高等教育
機関において経済学が正式の教科として位置づけられ、徐々に制度化・専門化されていく、その最も早い段階を代表す

27 和田垣謙三と明治・大正期の経済学界（１）
人物が和田垣であるといっている。この点を捉えても、経済学者としての和田垣の存在は、明治・大正期の社会政策思想史上、重要であると言える。

社会政策思想史上、和田垣謙三は、金井延その他社会政策学会の諸学者に比較して、あまり高く評価されていない。
和田垣は一八八八年（明治二十一）三月十五日発行の『国家学会雑誌』第二巻第十三号において、問題の論文『講壇社会主義』なる論文を公けにした。ここで自らドイツにおいて影響を受けてきたワグナー、シューマー、ブレームタノ、アドルフ・ヘルド、エルヴィン・ナッセ、シェーンベルヒ等、いわゆるドイツ新歴史学派経済学者によって創立されたドイツ社会政策学会の思想を、詳しく紹介論述したのである。

和田垣が、『ドイツの神秘主義者、ソーシャリスムを日本語で『講壇社会主義』なる日本語を学術用語として創始したことは意味が深く、これによって彼はわが国の社会政策思想史上に価値のないものを紹介したのであって、熱意を持って肯定的にとりあげたことは注目すべきものがあった（以下同）。

また、大淵利男はその財政学の紹介者としての和田垣について次のように述べている。

和田垣諒三、その名は、明治二十年（一八八七年）三月十五日発行の『国家学会雑誌』第壹号において、『財政学大意』を発表し、ドイツ財政学的導入と普及に貢献したいということ、および明治三十五年（一九〇二年）五月、伊国ルイジ、コッサ原著独国カラー、テーティヘールを独訳。日本法学博士和田垣諒三重読『財政学』全文和訳（全二巻）を刊行している。
和田垣謙三は万延元（1860）年、但馬国豊岡藩（現在の兵庫県豊岡市）に和田垣謙の次男として生まれている。父は豊岡藩の札場奉行、産物奉行などを務めた藩士であった。なお、河本重次郎によると、長兄の名は伊之助といい、弟（氏名不詳）もいたが、弟は大阪に出て早世し、また父と長兄は後に上京して、一時、商店を営んでいたが、あまり振るわず、そのうちに両者とも亡くなかったという。

和田垣は幼時より読書を好み、長じて久保田精一の門に入り、安井息軒、大橋詮庵らの門に学んだ。帰国後、文久元（1861）年に江戸勤番を命ぜられ、この間、安井息軒、大橋詮庵らの門に学んだ。帰国後、今度は『但馬聖人』と称された池田草庵の家塾、青鶴文書院に入門、ついで慶應2（1865）年に廃藩とともに廃校となり、久保田はその後、文部省に出仕するが、明治11（1878）年に退官、芝増上寺内に私塾成蔵を設けられた宝林義塾の塾長を務め、明治18（1885）年に同校が廃校となると、私邸に成蔵を復活するなど、生涯を教育者として活躍した人物である。

和田垣が久保田に入門したのはきりとした時期は分からないが、河本の回想によれば、私邸に成蔵を復活するなど、生涯を教育者として活躍した人物である。

本は次のように述べている。
この頃から和田垣の優秀さが周囲に際立っていたことが分かると、さらに明治4（1871）年には医師の菊池武文という人物についてドイツ語を学んでいた。ただ幼い和田垣に誰がドイツ語の学習を勧めたのかは定かではないが、確かに彼の頃は普仏戦争（1870〜71年）でプロシアが勝利し、ドイツ帝国が建設されるにあたって、その強盛がわけわから国の人々にも注目され、さらに同じ頃、明治政府がドイツ学習者が急激に増加し、ドイツ語の医学に範を取ることを決定したことが大きくな影響した。さて、明治5（1872）年、この年の和田垣に至って人生の最初の転機になった年である。すなわち、この年の5月、和田垣は同郷の先輩である村長寛太郎に連れられて、若い子とともに本郷にあった壱宜義塾に入学した。ドイツ語を教えるいわゆる独逸學塾が開校し、後に村長寛太郎に至るまでにほとんど姿を消す中、大熊の確固たる方針の下、明治30年代半ばまで存続した特別的な教育施設である。この頃は、同じ年、同じ本郷の地に県立師範が開校した進文学社にも入学している。進文学社は英語とドイツ語を教授していた私塾で、森鶴外が初めてドイツ語を学んだことも有名な塾である。
和田垣は壬申義塾、進文学社でドイツ語の習得に励む一方、先に上京していた久保田晴之ともへ時々顔を出していた。この頃、久保田は桓仁社という漢学塾を開いていたが、ここには子は、河本文が通っており、おそらく上京し、ついて和田垣は東京外国語学校を経て、開成学校に入学する。東京外国語学校は、学校の語学部門と外務省が所管していた学校を合併して開設され、英、仏、独、魯（ロシア語、清、中国語の五学科）が構成されていた。このような設立の経緯から、開設当初の同校は開成学校の一部として見られ、開成学校の予備校的性質とは、通訳養成のための学校という二重の性格を持たれていたという。ここで開成学校の歴史について未だ簡単に述べておく必要がある。明治6（1873）年8月、再び開成学校と称し、明治7（1874）年、東京開成学校となっている。開成学校に入学後、和田垣はドイツ語と鉱山学を専攻している。年少時より親しかったドイツ語はとてもよく、鉱山学を専攻することになったのである。実は、これには開成学校における教育方針の大きな変化が関係していた。開成学校は発足直後、外国語教育と学科の編成について重要な改変をおこなっていた。第一は語学の種類について主として財政的な理由により英語専用の方針を立てたことである。これは英独仏の三か国語のいずれかによって教育をおこなうとする大学南校以来の方針に対する重要な変更であった。第二にこの方針を受けて、英語による法学、理学、工学の三つの専門学科と、諸芸学、鉱山学という二つの付随的な学科が設置されることになったが、後者の学科は英語儒学のうち、諸芸学科は英語に転じることが困難なフランス語の生徒のために、また鉱山学科は同じ事情にあるドイツ語
彼らが学んだ当時の鉱山学科の時間割を見ると、算術、博物学、代数学、幾何学、地理学、画学、科学、物理学、語学、翻訳、体操といった科目が並んでおり、当然、そのほとんどはわゆる「お雇い外国人」教師による授業であった。ところが、この鉱山学科は当初の学科が本科へと進級するはずであった明治8（1875）年に諸学学科とともに廃止され、新たに物理学科、化学学科の二科が設置された。これにともない、同校の講授法は英語に統一され、それまでの鉱山学、諸芸學科に所属していた予科生に対しては、物理学と化学のいずれかを専修するかを任意に選択させた。特に物理学の選択が難しい者は、随意退学も許可され、物理学科は化学学科の相当の手続きに配属させることとされた。これらのことから、京師以外の日本に赴任した京師の教員も、教員としての役割を果たすことが必要となった。
られた。その結果、和田垣が所属していた当時の鉾山学予科生の進路は次のようなになった。和田垣はこのうち英語への転換を選んだ。この間の事情について、橋南篤郎の「東京開成学校の改革」という文章を引用しておきたい。

新設化学への進学希望者

英語への転換希望者

退校希望者

和田垣はこのうち英語への転換を選んだ。この間の事情について、橋南篤郎の「東京開成学校の改革」という文章を引用しておきたい。

明治九年「原文のママ」、東京開成学校改革、英学部のみを存して、仏学部及び独逸学部を廃止するの方針を定めた。於是乎仏学部にいた蓮中は、旧来の着衣を懸脱して、別に新衣を縫はさるべきからの場合に際したが、彼等の中には随分思い切った着替へ方をしたものが少なくない。当時、独逸学部に属した岩太、和田垣謙二、木場貞長等の蓮中がいた。下山、佐藤等は医学部に属する人物として、大体に於て各、転医に転英することに取り決めた。和田垣や木場が鉾山から文学に転じたことは、頗る思えた。

引用文中にある「原文学部」とは、この学科改編による英学への転換希望者の中に所属した後、明治九年（1876年）に新たに普通科が設置されたことを学際学科、また文献学科、さらに近代学科を所属したと推測される。この普通科は、それまで志望学科別に在籍して学籍を構成していたそれ
ぞれの予科（ただし教育内容は各学科共通）を統合して設けたものらしく、翌年に東京大学が新設されること、その後の母体となった課程である。そのカリキュラムを見ると、英語学を筆頭に数学、物理学、化学、博物誌、画学、理学（心理学、修身学）等が並んでおり、これはアメリカのハイスクールの影響を強く受けたものであって、英語でやるようになり、鉱山科と諸芸科（原文のマザー）の学生は、折角習った独逸語を捨てて英語をならなければならないふやうな始末であった。それから遂に大学に入学することになり、その時丁度私が十八で、和田垣君は十八でありました。まして、其処で特に英語を研究することになりました。それは、大学予備校の前半である大学予科というふのに、それを卒業して明治十年に二人の変転にいわば翻弄されながら、ドイツ語から英語へと専攻することになったのであった。明治10（1877）年、東京開成学校、東京医学校を統合して文部省所管の下に法学、理学、文学の各学部よりなる
学芸者（格言）

はなはだしい

・誠に学ぶ

織機（壊され）

・誠に学ぶ

織機（壊され）

・誠に学ぶ

織機

・誠に学ぶ
さらに文学部開設時の教員陣容を見てみると、教授としてはエドワード・W・サイル（担当は史学および道義学）が下同じウィリアム・A・ホートン（英文学）、外山正一（心理学および英語・講師としては中村正直（漢文学）、横山由清（和文学）、信夫篤（漢文学）といったメンバーで、翌明治11（1878）年にはフェノロサが着任し、当初は主に政治学と経済学のうち理財学と改称した。

ここに入学した和田垣は、ホートンの講ずる英文学に興味を持ち、シェークスピアの『リア王』を『李王』と題して、當時東京大学経理補として同校の教育行政を指導していた中村正直（漢文学）の影響でキリスト教にも関心を向けるようになり、後の英国留学中にはケンブリッジで洗礼を受けている。しかし、その後の和田垣の人生の進路を大きく決定づけたのは、この時期に経済学を自らの専攻に選び、本格的に学び始めたことである。そして、この和田垣の選択には、同郷豊岡の先輩である浜尾はたてがみの出で、豊岡の後進に和田垣謙三がおり、浜尾はこれに見込みをつけ、なるべく引き立てようと洋行させ得るのであって、それで和田垣にすすめ、和田垣は「はしご乗気になり熱心に経済学を修めた。当時経済学は理財学と称し、文学部で哲学、政治学、理財学者三科の二つを兼ねべきに定まり、和田垣は理財学と哲学を修めた。
しかし、和田垣にとって浜尾的存在は単に同郷の先輩であり、いち早く和田垣の才能を認め、経済学者への道筋を突けた人物といえば、明治元（1868年）には藩発見学生に選ばれ、大阪の毎日新聞に入門、さらに翌年、吉村寅太郎らと上京し、慶應義塾、東京帝国大学に入学した。その後、横浜高島学校や共学義塾などの教員を経て、明治5年（1872年）に文部省に出仕、南校舎中監事に任ぜられた。そして、以後の浜尾の人生は、これを前身とする東京大学の歴史と切って離すことはできない。アメリカ留学から帰国後、明治7年（1874年）、東京帝国大学創立に宮崎呉服を一緒に就任、総務の加藤弘之を補佐する上で、明治26年（1893年）には帝大教授に任命され、明治30年（1897年）までその職にあり、さらに明治38年（1905年）に総長に再任、大正元年（1912年）まで在任した。この間、元老院議官、貴族院議員、文部大臣、顧問などを歴任し、最後には枢密院議長も務めた。

こうして和田垣は経済学者への道を歩み始めたことになった。そこで東京帝国大学の草創期における経済学教育の歴史についてもふれておく必要がある。先に見たように和田垣が入学した文学部第一科に、経済学の授業科目が設置されている。明治12年（1879年）に文学部の設置により設けられた経済学の授業科目は、和田垣が通じた経済学を学び、明治11年（1878年）よりフェノロサが実際に講義を開始した。この講義は、和田垣が受講したのもこの最初の講義である。冒頭に述べたように、これが官学における最初の経済学講義とされる。和田垣が通じた経済学を学び、さらに明治38年（1905年）には総長に再任、大正元年（1912年）まで在任した。この間、元老院議官、貴族院議員、文部大臣、顧問などを歴任し、最後には枢密院議長も務めた。

こうして和田垣は経済学者への道を歩み始めたことになった。そこで東京帝国大学の草創期における経済学教育の歴史についてもふれておく必要がある。先に見たように和田垣が入学した文学部第一科に、経済学の授業科目が設置されている。明治12年（1879年）に文学部の設置により設けられた経済学の授業科目は、和田垣が通じた経済学を学び、明治11年（1878年）よりフェノロサが実際に講義を開始した。この講義は、和田垣が受講したのもこの最初の講義である。冒頭に述べたように、これが官学における最初の経済学講義とされる。
の地位を与えられることがとなった。さらに明治14（1881）年には文学部は三学科制となり、第二科（哲学科）、第三科（政治学及理財学科）が設置され、この年、田尻維次郎講師を嘱託されて着任した。そして、これがその後東大の経済学教育における、「フェノロサ＝田尻時代」と表現されている時期にあたる。それでは和田垣が初めて本格的に接した経済学であるフェノロサの講義とはどのような内容のものであったのだろうか。これについては、文部大臣に対する「申報」として彼自身の手による講義報告（明治十一年度）が残されているので次に引用しておく。

本科ニ於テハ専門学ノ基礎トシテ一層深ニ済ル学問ヲ知ルラシムルヲ要ス。因テ先ツ生徒ニミルロノ理財原論ヲ授ケ其過半ヲ日々暗記セシムルヲ努メ渐ク之ヲ熟習スルノ後更ニ授クルニ他派名家ノ著セル同書ヲ以テセリ。即ち其首タル者ヘアリ及ヒヘアノノ著書等ヲ次ニ專ラジェボンズノ貨幣論ヲ攻修セシメ更ニ此説ヲアカレリノモノ貨幣論ヲ対照シテ両端ヲ叩カシメ之ヲ終フニ万国商業ヲ解釈及ビ自由交易保護主義ニ大要ヲ以テセリ。
卒業であった。直ちに欧州留学の途についた。和田塙はまずイギリスのロンドン大学に、つづいてケンブリッジ大学のキングス・カレッジに学び、これらの大学でフォックスウェル（Herbert Somerton Foxwell）、レヴィ（Leone Levi）らについて経済学を専攻したとされる。しかしながら、ここで和田塙はこれらの大学における経済学の講義に大きな失望を味わったようである。その理由については未だ次のように説明している。

和田塙君は英国で第一に感じたことは同国における大学の講義の話らぬことである。それもその篋でせし、君は日本の大学に居る中に相当の教師に就て経済学を研究し、且つ英文の原書で、経済に関するものは大抵読破したのであります。それで英の大学に入れて見ますと、自分も研究せんとする経済学の講義は、宛然自分が学

生に教へる位の程度でありましたから、其程度は至って低く、且つ詰らなかったのであります。若しその大学とは一定の教科書といふものがなく、教師が二三の学説を比較して之を教壇で講義するのであつて、故に参考書などに読破して居りましたが、英国の大学に参っても、耳新しい講義を聴くことは出来なかったので、多少失望の感もあつたろうと思います。

また谷倉芳郎は、当時のイギリスの大学の学風について、「人物を養成するのが眼目で学問の重きを措かず、又其の講

義は程度の低いものであつて、日本の大はドッツ風に学問に重きを置いたから、日本の大学を卒業して洋行する人は、独逸大学では新しい進歩した大学論を聴くことが出来ますが、英国大学では余り耳新しい知識を得られない様に感じした。
学ぶために留学したにもかかわらず、イギリスの大学における経済学教育の水準に失望した和田垣君がイギリス滞在中に

斯く君は剣橋大学に於て聴講生として講義を聞いて居たにも拘らず、右にいふような次第でありましたから、

自然其力を他に注ぐやうになったのであります。即ち君の性質上非常に興味を感じた文学方面の研究に発展するや

うなりましたのは無理ならぬことと思ひます。それで劇場に行つて見たり、ピアノを弾いたり、英詩を作ったり、

或ひは日本の和歌を英訳して英人に紹介することなどに時間を費しました。同様のことを井上十吉君次のように述べている。

私が和田垣博士に初めて会ひましたのは、明治十三年の暮か十四年の初頃に於ける日本人の集会の席上であつ

たと思ひます。斯かる関係からして、段々懸念を重ねまして、それから博士は明治十五年に剣橋大学に入学され

て、経済学を研究されました。治頃でも博士は、なかなか英文の才能があったので、盛りに留学中に、日本文や

漢文を英文に訳して、其の技倶を発揮してそれを非常に楽んで居られました。それで赤壁賦なども英訳したこともあります。なお、和田垣君は官費生の身分で留学していたが、ケンブリッジ大学には正式に入学したわけではなく、聴講生のよう

で、異例であろう。
規則立てて入学して研究した訳ではない。只聴講生といふ資格でフォックスウェル氏に就て、経済学の講義を聴く
て居た。従って試験を受けるといふこともなければ、又卒業するといふこともないのであると証言している。

Wagner、シュモラー（Gustav von Schmoller）らについては再び経済学を専攻した。シュモラーは言うまでも
もなく、ドイツ新歴史学派経済学の泰斗で、ドイツ社会政策学会の有力メンバーである。プレンツラー（Lojo Brentano）
といった当時の鋭々たる（旧）歴史学派の経済学者が集積していたが、学会の実際的
指導はシュモラー以下の新歴史学派の世代が担った。彼らの多くは60年代にはドイツ・マチュエスター派の熱心な支持
者であったが、ドイツ帝国建設時代のナショナリズムの高揚の中で社会問題の存在を重視し、経済への国家的干渉
を認め立場へと変化していった。こうして自由放任主義と楽観的な社会調和論の立場から「社会問題」の存在を否定
するドイツ・マチュエスター派に抗しつつ、政策堀砲と調査研究を行う非党政的な団体として組織されたのが、社会
政策学会であった。学会メンバーには、大学教授の他、開明的な官僚・企業家、労使協調的労組指導者も参加して
いた。彼らの基本的な立場はプロイセンの立憲君主主義の官僚政治に信頼を寄せ、開明的な官僚が社会政策を実施する
ときの資格だ。ツ・マチュエスター派によって講

議され、組織されることが経済学者の総体を意味していたことに留意する必要がある。
このドイツ留学中における、これら新歴史派経済学の台頭とそれに指導されていた会社経営学の関与を抜きにしてはあり得ないことは、既に冒頭に引用しておいた住谷の指摘で十分であろう。本論文の内容についての詳しい紹介と検討は次号以降に譲るが、この論文の末尾に彼がわざわざ付け足した“附言”と題された文章は、和田垣がドイツにおけらする学者の社会的な地位と役割について極めて強い印象を受けたことを率直に披露したものとなっている。

余ハ序ニ於テ附言シタニテコトアリは何ノク学者ニ屬スル栄誉トソノ占マル所ノ位置スルナリノ国家学者ハ其名ヲテスレバ即チ学者タルニ過ガナルナリ教授タルニ過ガナルナリテヲ視レバ壹独リ大学ノ教授タルニ止マラシマラ上ハ宰相大臣ヨリ下ハ天下公衆ニ至ルマデ皆学ノ教授ヲ蒙ラセテハナリニ必ハズ民ニ謳セズ亦故ニニト争ハズ小心戯々真理ヲ所在ヲ探求シ敢テ其結果ヲ何ヲ顧慮セズ正シキハ堂々シテハ正シカラルハ侃々々ミ駿シ厳然トシテ能クヲ官民ノ間ニ中立ス否ナ官民ノ上ニ社会ノ外ニ聴立社ノ専相ヲ畏サルテ願ヲ田ヲ言論ハ恰モ天使ノ雲間ヨリ発スル神託ノ如クモノヲ歌テテテヲ上ヲクヲ唱ヲテテ伊ガナルナクソンノ世道ヲ補益シ天

寧ロ重キ所アルモ決シテ軽カラルナリ否ナル如キ学者ニ富メル邦ハ eiusmodナル故ニ人ノ侃々ハ群集ニ囂々ニ比シテ
(抜粋)

オオシマカンギョウは、オオシマカンギョウ科の植物で、オオシマカンギョウ属に属する。

オオシマカンギョウは、曾經から東アジアに分布し、特に日本でよく見られる。

オオシマカンギョウの花は、春に咲き、淡い黄色の花房を形成する。

オオシマカンギョウは、観賞植物として広く栽培されている。

参考文献:
1. 田中浩一, "オオシマカンギョウの栽培と利用", 雑草学会, 2005年
2. 市川正弘, "オオシマカンギョウの組織工学", 東京大学出版会, 2008年
昭和8（1933）年に和田垣の墓碑が建立されたのを記念して発行された小冊子で、十五名の回想が寄せられているが、内容的には『和田垣博士と作集』の『諸士追憶録』と重なっているものもある。
なお、以下の記述で和田垣の経歴における基本的な情報は、特に注記がない限り、①の『和田垣謨三博士年表』と②の記述に依る。

なお、河本重次郎『回顧録』（河本先生喜寿祝賀会事務所、丰岡市史、1936）17頁。
河本は、1943年に『第一書房、復刻版』1981年3月30日、48頁。尚、本条に於ては上村直己『大熊春吉と和田垣』の記述にしたがった。

和田垣が東京外国語大学、開成学院へそれぞれ Intro したのかについては、注（9）の①の『和田垣謨三博士年表』は東京外国語大学入学にはふれず、明治六年三月、開成学院入学後、独逸語を学ぶとあるだけであり、②は『明治』六年五月。
東京外国語学校三入り後開成学校三入於独逸語鉱山学ヲ修ヒとしか記していない。しかしながら、東京外国語学校が開設されたのは同年11月のことであり、開成学校の改称は同年4月、和田堀の同郷への入学は翌明治7年でなかったのか、推定される。

木場高は「私が和田堀君と親しくなったのは、明治七年で、両人とも同時に東京外国語学校の独逸語科の学生生となりました。その後、和田堀君は開成学校の鉱山学科へ転校を命ぜられました。このことを考えると、木場高は「時代の友人和田堀君との逸話」580頁を前掲、大修館書店、1998年、968頁、969頁に収録されたもの。川澄哲夫編『鈴木孝夫監修資料日本英学史』下、文明開化と英学に掲載されている。

著者（的）の『和田塚謙博士年表』には、「明治八九年九月、東京大学に進学することを決意した。との表記がある。転英学の学級についての学習内容については前掲、東京大学百年史と、それぞれ研究。普通科については同書307頁、308頁、310頁、350頁、352頁を参照。